

往復書簡

今回からは、村上 進氏（熊本県、(有)木之内農園）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡が始まります。

拝啓 高木 勇樹様

梅雨の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。九州は例年より早く梅雨入りしましたが、阿蘇高原では晴天が続きます。田植え後の水面を爽やかな風が吹いております。

このような機会をいただき、高木様とお手紙交わせることをうれしく思います。

私は非農家に育ち、東京で会社勤めをしておりましたが、二十年前、何もわからなまま農業界に飛び込みました。当時いわゆる「よそ者」が「ムラ社会」に入ってみると、戸惑うことが多く、知らないことばかりの連続でした。共同体ゆえの「役」が多いことにも正直驚きました。ムラ社会には特有の慣習があり、外部からは時に閉鎖的に映り、なじみづらい面もあるようです。しかし、こうした慣習は農村の文化そのものであり、それゆえ長い年月、日本の原風景を守り続けてこられたのだと感じます。

私も以前はそうだったように都会の方は、阿蘇の草原が農家によって作られた人工的な自然であることや、集落の野焼きでの防火帯作りでは急斜面を延々と草刈りをしなければならず、そこにはお年寄しかいないことや、棚田の景観も高齢化した農家さんが守っていることなど知らない方が大勢いらつしやいます。

農業は環境を保全し食料を生産する素晴らしい職業である反面、広大な地域を守り、そこには膨大な労力が必要であることも事実です。近年、農業界には新規参入が増え、このことは非常に良いことだと思えます。しかし、作物を作る、経営することに目が向いていて、地域社会の中での農業ということに考えが及んでいない方が多いようです。経済活動と地域活動が混然一体となっている

のが今の農村の姿であることを意識していない方が多いのです。自身の経営はもろくも優先です。就農したばかりで余力がないこともあるでしょうが、心の中では地域に目を向けられるバランス感覚のある方たちが多く育ってもらいたいと痛感します。二十年が経ち、ようやく集落に溶け込めつつあります。信頼という財産を得るために一世代かかるという農村の現実の中で、新たな農業人の育成と地域の活性化のためには、皆が共に手を携えてゆくことが増々必要なのだと日々感じております。

平成二十五年六月吉日

敬具

村上 進（むらかみすすむ）

一九六四年 埼玉県川越市生まれ
一九八九年 日本デザインナレッジ学院修了後デザイン会社勤務
一九九六年 木之内農園勤務
二〇〇八年 (有)木之内農園代表取締役社長就任
現在、いちご、ミニトマト、じゃがいも等栽培、観光イチゴ狩り、農産加工、新規就農者育成を通し生命総合産業を目指す。



上段：木之内農園 村上社長
下段：木之内農園の社員との一枚

拜復 村上 進様

都会人にとつては、むしろとうとうしいだけの梅雨ですが、農業にとつては絶対必要な（ただし災害をもたらさない程度）季節ですね。

木之内農園さんには随分昔ですがお訪ねし、木之内均さん（当時社長、現在J-PAO監事）のご案内で、いろいろ勉強させて頂いたことを昨日のように思い出しております。

条件の悪い田んぼを玉子拾い農園にしたアイデアに目からウロコの驚きを感じたことも楽しい思い出です。

貴兄と木之内均さんのご縁は知る由もありませんが、小生の知る限り木之内さんも非農家から農業界に若い頃飛び込んだ方と承知しています。貴兄の二十年の経験とご苦労がムラ社会の本質の理解と日本の原風景の真の守り手への思いに昇華していることに深い感銘を覚えております。

また、半世紀ほど前（昭和四三〜四五）に九州農政局に勤務していた頃、阿蘇久住飯田の草地総合開発調査に関わり、阿蘇種畜牧場に畜産（草地酪農と水田酪農の経営効率の比較）の勉強のため、何度も通いました。その折野焼きを實際見る機会に恵まれ、その大変さとそれをしなければ草地の活力を守れないことを学びました。

経済活動と地域活動一体を目指す農業経営でなければ農村風景にはならないという貴兄の言には全く同感です。そのためには農業経営が小生の持論

である「持続的農業経営体（農地、人、技術力、企画販売力などを経営資源とし、農業を産業として、持続する経営を行う経営体）」により取り組まれることが必要だと思えます。

このような経営体は、地域の雇用の場を提供し、人材を育み、それを核に商工とつながり、信頼を絆とした農村集落の活力の源泉となるからです。

小生のこのような考え、思いについて、次回、現場でご苦労されている貴兄の率直なご意見を伺えると有難く存じます。

平成二十五年六月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 農林中金総合研究所理事長
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

